

『うちの嫁は泥棒だ！』

配役：嫁「〇〇さん」（介護者）、
姑もしくは舅「おばあちゃん」「おじいちゃん」（認知症）
解説者

【姑】「お～い！お～い！あき子さ～ん！」

嫁、エプロンで手をふきながら

【嫁】「な～に？おばあちゃん。」

【姑】「私の財布がないんだよ。ここに入れておいたはずなのに。
あき子さん知らないか？」

【嫁】「私は知らないけど、本当にここに入れたの？
どこかに置いたんじゃないの？よく探したら。」

【姑】「私はちゃんと入れておいた。あき子さんが盗ったんだろう？
泥棒はよせ！いつもいろんな物がなくなる。私のお財布返しなさい！」

【嫁】「そんな訳ないでしょう！おばあちゃん、無いとか言っておきながらいつも自分の
勘違いで後で出てくるでしょう。
いつもいつも、いい加減にして下さい。こっちは忙しいんだから。」

嫁、相手にしないで行こうとする。

姑、嫁のエプロンを引っ張って

【姑】「ごまかす気か！返せ！返せ！」

【嫁】「私は知りませんよ！」

【姑】「返せ！この泥棒め！」

【嫁】「まったく・・・」

【嫁・姑】「いい加減にして！」

『解説』

これは典型的な物盗られ妄想と言って、比較的認知症の初期の頃から出現します。
自分で大切な物を大事にしまい込んだことやしまった場所、自分が使ってしまったことを
すっかり忘れてしまうのです。誰しも自分がしまった所に物が無ければ誰かに盗られたと
疑います。この症状は他人ではなく家族など認知症の方ご本人にとって身近な方に対して
多く出現します。特に日頃同居している方が対象になりやすい行動です。
ではこういう時にはどのように対応すれば良いのでしょうか。続きをご覧ください。

【姑】「私の財布がないんだよ～。ここに入れておいたはずなのに。
あき子さん知らないか？」

【嫁】「ええっ！本当？どんなお財布？」

【姑】「この位の赤い色のだよ。あき子さん知らないのか？」

【嫁】「どこへ行ったのかしら？ちょっと一緒に探してみましようよ」

【姑】「そうだね〜。」

嫁、姑で探し始める。

嫁、財布を見つけるが姑に見つからないようにわかりやすい場所にしまう。

【嫁】「ないわね〜。私はこっちを探すから、おばあちゃんはこの辺りを探してみて。」

嫁、財布をしまった場所を指差す。

姑、指差された場所を探しはじめ財布を見つける。

【姑】「あった！あったよ。こんな所にしまい込んだんだね。うっかりしていたよ。悪かったね〜あき子さん。」

【嫁】「私もよくありますよ。良かったですね。」

【姑】「じゃ何か甘い物でも買ってこようかね！」

『解説』

いかがでしたか？

認知症の周囲症状として、一度は通過する物盗られ妄想です。記憶ができない、覚えることが出来ないことに加え先ほどもお話ししたように、不安と混乱を抱えている中で正しい判断が出来なくなっているのです。認知症のご本人といくら言い合っても、ご本人にとってどんどん悪い人になってしまい、結果こういった症状が多く出現するようになるのです。認知症の人を私たちの世界に合わせるのではなく、私たちが認知症の方々の世界に溶け込むことがとても重要なのです。

先程の対応のように本人の言うことを認め、そして本人自身が見つけ出せるように工夫するといいいでしょう。あなたが見つけて、なくなった物を出してしまっは、あなたが盗ってしまったと考えてしまうのです。

是非、認知症のご本人と一緒に探し、ご本人が見つけ出せるように工夫してください。

犯人にされ、泥棒扱いされる家族はとてつらいのですが、これも認知症という病気がなせるワザなのです。